



実用新案登録願

(1,500円)

昭和53年12月17日

適

特許庁長官 片山石郎 殿

1 考案の名称

複答器

2 考案者

エビナシコクブシダイ  
住所 神奈川県海老名市国分寺台3-11-21  
氏名 早川 菊哉

(ほか 0 名)

3 実用新案登録出願人

住所 東京都千代田区丸の内二丁目5番2号  
氏名 (604) 三菱モンサント化成株式会社  
代表取締役 脇田 代子郎

4 代理人 〒100

住所 東京都千代田区丸の内二丁目5番2号 三菱化成工業株式会社内  
氏名 (6806) 弁理士 長谷川 一

(ほか 1 名)

5 添付書類の目録

(1) 明細書1通 (2) 図面1通 (3) 委任状1通 (4) 願書副本1通

方  
式  
審  
査



51 168988

49. 3. 1,000 (円税)

53-86233

## 明 細 書

### 1 考案の名称

#### 複 合 容 器

### 2 実用新案登録請求の範囲

容器の壁部を構成する可撓性材料からなるパネル材の所要部に、パネル材の接合及び補強のために合成樹脂材料からなる骨組を設けた複合容器において、前記壁部の所要箇所に、壁部を貫通するミシン目で囲繞された引きちぎれ部を設け、該ミシン目の設けられた壁部の少なくとも片面にミシン目に沿つてミシン目を閉塞する補強骨組を設け、該補強骨組には引きちぎり用のタブを設けたことを特徴とする複合容器。

### 3 考案の詳細な説明

本考案は液体、粉末等を収納する容器に好適に用いられる複合容器に関するものである。

従来、液体、粉末等を収納するために用いられる紙、プラスチック等で作られた容器としては、種々のものが用いられている。特に液体を収納する容器の場合は、容器開口部と容器蓋と

の間の密封性が問題となり、現在では、容器蓋としてアルミニウムフオイルを用い、容器開口フランジ部又はアルミニウムフオイルの一方又は双方に接着剤を塗布し両者を重ね合わせて接着する方式が多く採用されている。

しかし、このようなアルミニウムフオイルを使つたものは、内容物を収納容器から取り出す際、容器のフランジ部とアルミニウムフオイルを剥離しなければならず、この場合、容器のフランジ部に予め塗布した接着剤が残り、外観上好ましくないばかりでなく、保健衛生上も問題がある。

また、このようなアルミニウムフオイルを用いるもののほかに、例えば、天面となる紙状物の周縁に容器の口部に嵌合するような合成樹脂製のフランジ又は袴状部を射出成形法等により形成させて所望の構造の蓋としたものもあるが、このような構造の蓋は、容器開口部への施蓋、開蓋が容易であるが、容器と蓋との密封性に問題があつた。

本考案者はこのような欠点を解消した容器を提供すべく種々検討を行なつた結果、容器の側壁部及び底壁部を構成する可撓性材料からなるパネル材の所要部にパネル材の接合及び補強のために合成樹脂材料からなる骨組を設けた複合容器を用い、この複合容器の特性を生かすことにより密封性が良好で、収納物の取り出し操作の容易な複合容器が得られることを見出し、本考案を完成した。

— 3 —

材の所要部に、パネル材の接合及び補強のために合成樹脂材料からなる骨組を設けた複合容器において、前記パネル材の所要箇所に、パネル材を貫通するミシン目で囲繞された引きちぎれ部を設け、該ミシン目の設けられたパネル材の少なくとも片面にミシン目に沿つてミシン目を閉塞する補強骨組を設け、該補強骨組には引きちぎり用のタブを設けたことを特徴とする複合容器に存する。

以下、本考案に係る複合容器の一例につき図面を用いて詳細に説明するが、本考案はその要旨を越えない限り、以下の説明に限定されるものではない。

第1図は本考案の複合容器の一例を示すもので、(1)は斜視図、(2)は平面図、(3)は(2)のA—A部分における断面図である。第2図は本考案の複合容器の他の一例を示すもので、(1)は斜視図、(2)は平面図、(3)は(2)のB—B部分における断面図、(4)は第2図(1)に示した容器のC—C部分における断面図である。第3図は(1)～(4)は本考案

の複合容器の他の一例を示す斜視図である。

図中、**1**は壁部、**2**は骨組、**3**は補強骨組、**4**はタブ、**5**はミシン目、**6**は引きちぎれ部をそれぞれ示す。

まず、本考案の複合容器を製造する方法の一例につき、その概略を説明すると、最終的に得られる製品の一部、例えば容器の側壁部と底壁部を形成する部分を、予め可撓性材料から切りぬいて準備し、この可撓性材料からなるパネル材を、容器製造に先き立つて射出成形金型のキャビティ内に固定し、金型キャビティの残余の部分、例えば容器の上縁部、下縁部、壁面リブ等の骨組を形成するキャビティ部分に、溶融熱可塑性樹脂を注入し、この樹脂を冷却固化してパネル材と骨組とが一体となつた容器を製造する方法が用いられる（より詳しくは米国特許第3,119,540号明細書等を参照ありたい。）。

次に本考案の複合容器の構成について説明する。

壁部**1**はパネル材、すなわち、紙、紙と合成

樹脂と金属箔との積層物、合成樹脂シート等、容器の用途により適宜の材質のものからなる可撓性材料により構成されている。

この壁部<sup>1</sup>、すなわち、容器の底壁又は側壁には、壁部を貫通する多数の孔よりなるミシン目<sup>5</sup>が設けられており、このミシン目<sup>5</sup>により囲繞される部分が引きちぎれ部<sup>6</sup>となる。ミシン目<sup>5</sup>及び引きちぎれ部<sup>6</sup>を形成する方法は通常紙等にミシン目を形成する方法で良く、通常容器の壁部<sup>1</sup>を構成するパネル材がまだ容器状にされる前、すなわち、平板状であるうちに設けられる。可撓性材料からパネル材を所定形状に切り出す際に、同時にミシン目<sup>5</sup>を形成するのが簡便である。

また、このミシン目<sup>5</sup>はパネル材の容器の側壁部を構成する部分及び底壁部を構成する部分のいずれか一方の部分に又は双方に設けられても良い。

このようにして設けられたミシン目<sup>5</sup>を有するパネル材を、このまま複合容器としたのでは、



容器に収納した収納物がミシン目５から漏れてしまうので、この部分を補強骨組３で閉塞する。

補強骨組３の形状としては、ミシン目５を良好に閉塞し、かつミシン目５で囲繞される引きちぎれ部６が良好に引きちぎれるような構造とされていればどのような形状でも良い。

具体的一例を示せば図に示すような構造であり、例えば、収納物として液体を収納する場合等では、液体の染み出し等を考慮して容器の内側となる部分にミシン目５に沿つて連続する環状の補強骨組３を設けることが好ましい。勿論、収納物によつては容器の外側のみとする場合や容器の内外両側に補強骨組３を設ける場合もある。

補強骨組３には、引きちぎり用のタブ４を容器の外側に添つて設けるが、この引きちぎり用のタブ４は、補強骨組３と容器の引きちぎれ部６が良好に引きちぎれるような構造のものであればどのような形状のものであつても良い。

また、引きちぎり部６により良好に引きちぎ

りが行なわれるよう補強骨組 3 は、引きちぎれ部 6 とは強固に接合され、引きちぎれ部の周囲とは比較的弱く接合されていることが好ましく、例えば第 1 図 (f)、第 2 図 (f) に示すように、補強骨組 3 の壁部との接合面積を変えたり、補強骨組 3 の厚みを変化させたりして調節すれば良い。

この補強骨組 3 及びタブ 4 を形成する方法としては、パネル材を射出成形機等の金型内に挿入保持し、次いで溶融した熱可塑性樹脂を金型に導入して容器の上縁フランジ部、下縁補強リブ部、これら両者をつなぐ壁面リブよりなる骨組 2 を形成する際、この骨組 2 と同様に形成されれば良い。

具体的には、射出成形機等の金型の所要部に補強骨組 3 を形成する空隙を設け、骨組 2 を形成させるキャビティと連通させておくことにより行なわれる。

この際パネル材の所要部に適宜の処理を施し、例えば補強骨組 3 はパネル材の壁部 1 と良好に接着するが、タブ 4 は壁部 1 にあまり接着しな



い状態とすることも可能であり、このようにすることによりタブ４を引張るのが容易となる。

本考案の複合容器は、可撓性材料からなるパネル材と合成樹脂の骨組とからなることを生かし、骨組を形成させると同時に、容器の開口を行なう部分、即ち補強骨組及び引きちぎり用タブを形成させるものであり、その製造は容易である。

骨組２、補強骨組３等を形成する材料はポリエチレン、ポリプロピレン等のオレフィン系樹脂、ゴム強化ポリスチレン、ＡＢＳ樹脂のようなスチレン系樹脂、塩化ビニル系樹脂等がよい。

本考案に係る複合容器は次のようにして充填、使用する。まず第１図及び第２図に示した容器は、通常のコップのように直径の大きい部分を上にして物品を収納する。しかる後アルミニウム箔などを、開口部フランジ部分に接着密封すればよい。

このように本考案に係る複合容器に収納した物を取り出す場合には、容器を第１図(イ)及び第



2 図(1)のような状態におき、タブ4を引いて引きちぎれ部6を引きちぎれば、この部分が開口し、収納物が液状である場合は、この開口から注ぎ出したり、ストローで吸い取ることができ、容器のシール部分を引きはがさなくとも、良好に収納物を取り出すこともできる。また、アイスクリーム、プリン等の半固形物、その他固形物を収納した場合には、先ず直径の大きい部分側のシール部分を引きはがし、次いで容器を第1図(1)のような状態にして収納物受け皿の上において引きちぎれ部6を引きちぎれば、収納物は自重によつて、又は引きちぎつた穴を通して上から押すことによつて、収納物をシール部分に接触させることなく、容易に容器から取り出すことができ、本考案に係る複合容器の補強骨組や引きちぎり用のタブは、容器の骨組を形成すると同時に形成することができるので、製造法も簡単であり、<sup>52</sup>実用的価値は極めて大である。



#### 4 図面の簡単な説明

第1図は本考案の複合容器の一例を示すもの



で、(1)は斜視図、(2)は平面図、(3)は(2)の A - A 部分における断面図である。第 2 図は本考案の複合容器の他の一例を示すもので、(1)は斜視図、(2)は平面図、(3)は(2)の B - B 部分における断面図、(4)は第 2 図(1)に示した容器の C - C 部分における断面図である。第 3 図(1)～(4)は本考案の複合容器の他の一例を示す斜視図である。

図中 1 は壁部、2 は骨組、3 は補強骨組、4 はタブ、5 はミシン目、6 は引きちぎれ部をそれぞれ示す。

出 願 人 三菱モンサント化成株式会社

代 理 人 弁 理 士 長 谷 川 一

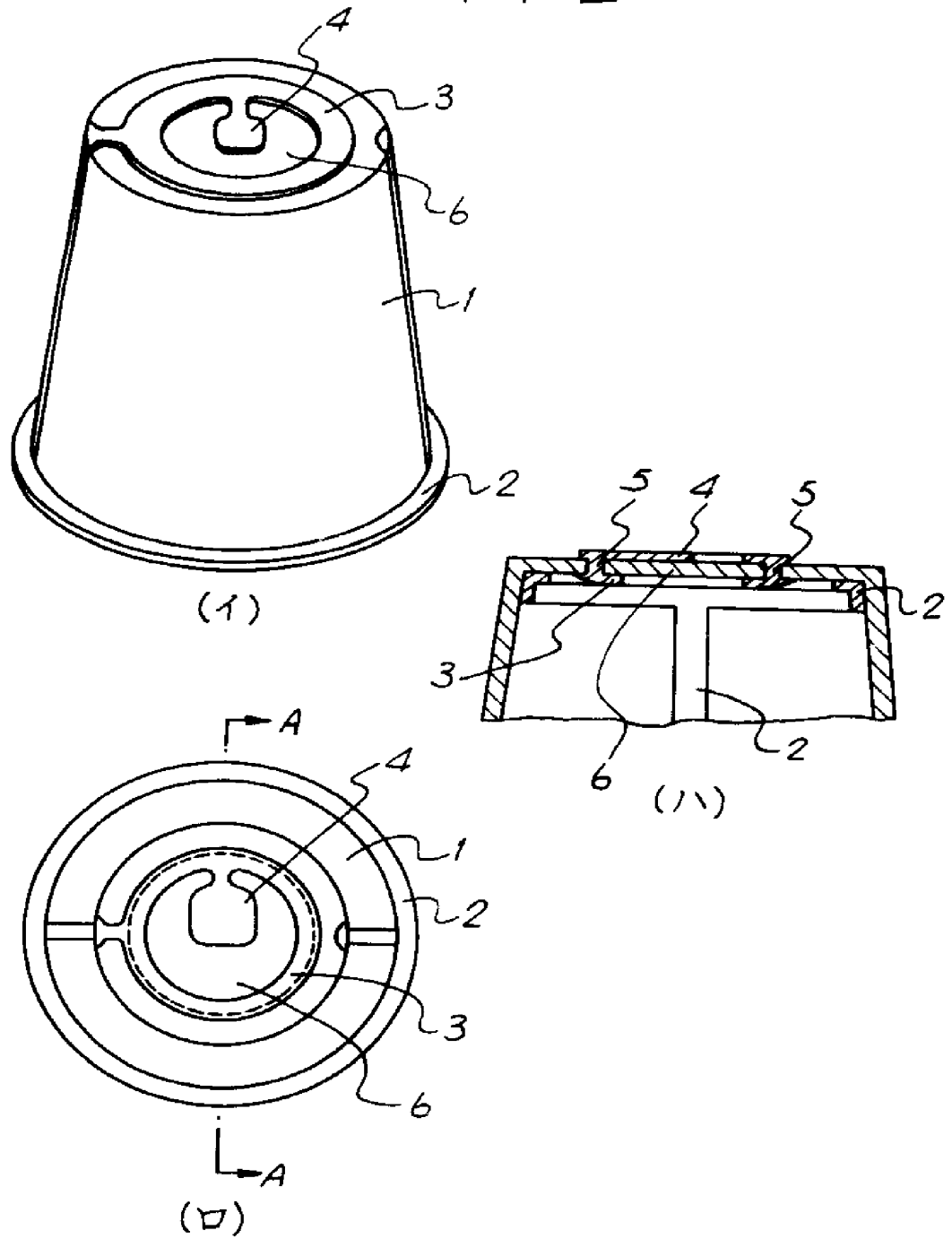
( ほか 1 名 )



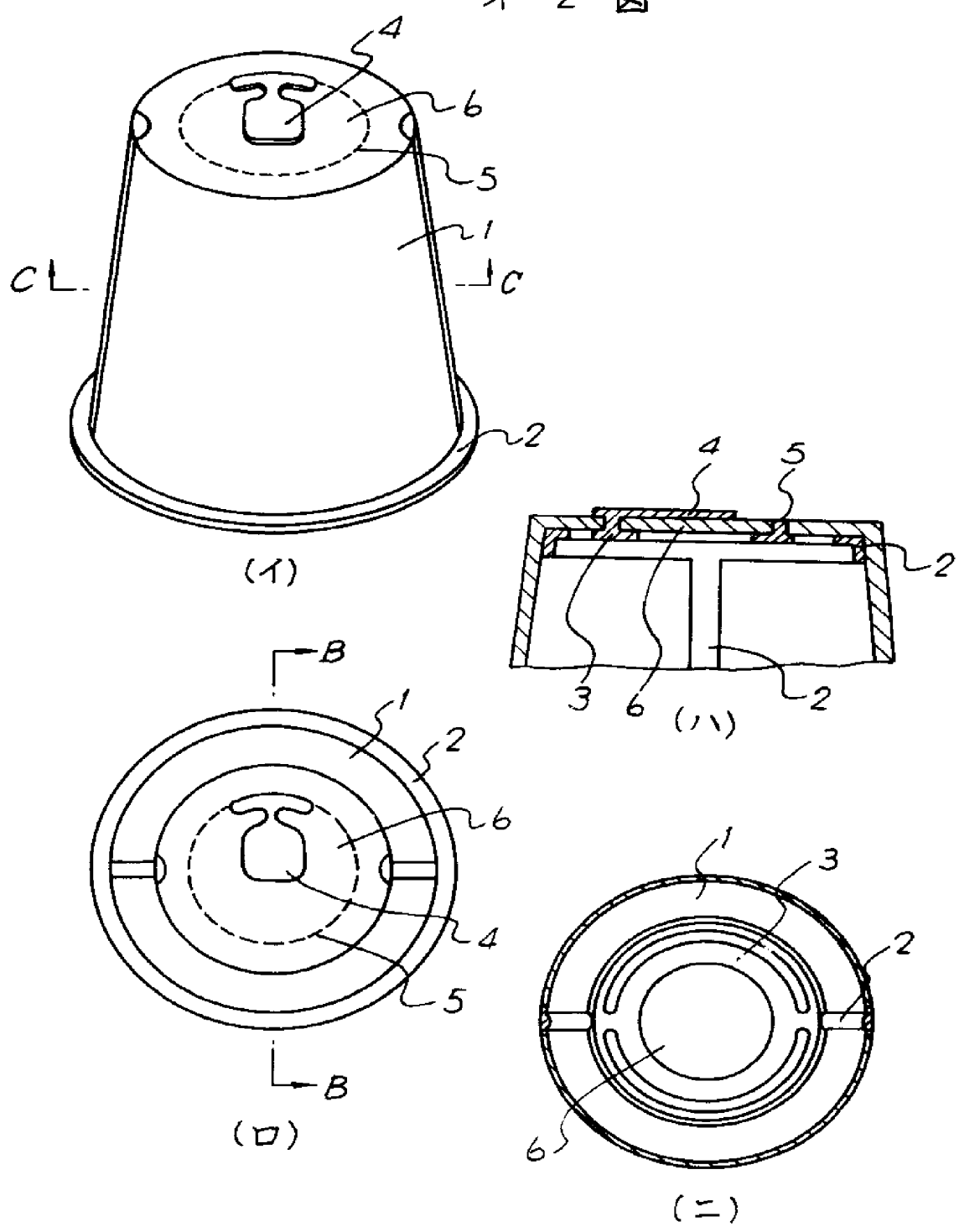
特許  
審判  
部

特許  
審判  
部

図 1 \*



※ 2 図

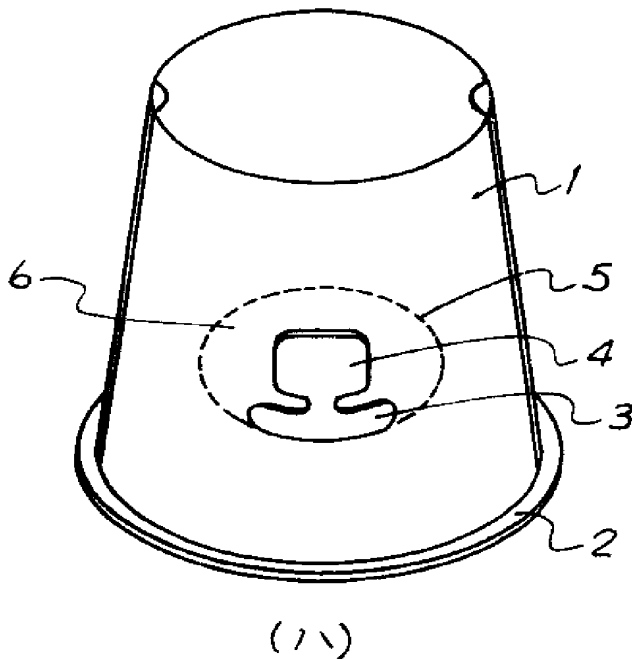
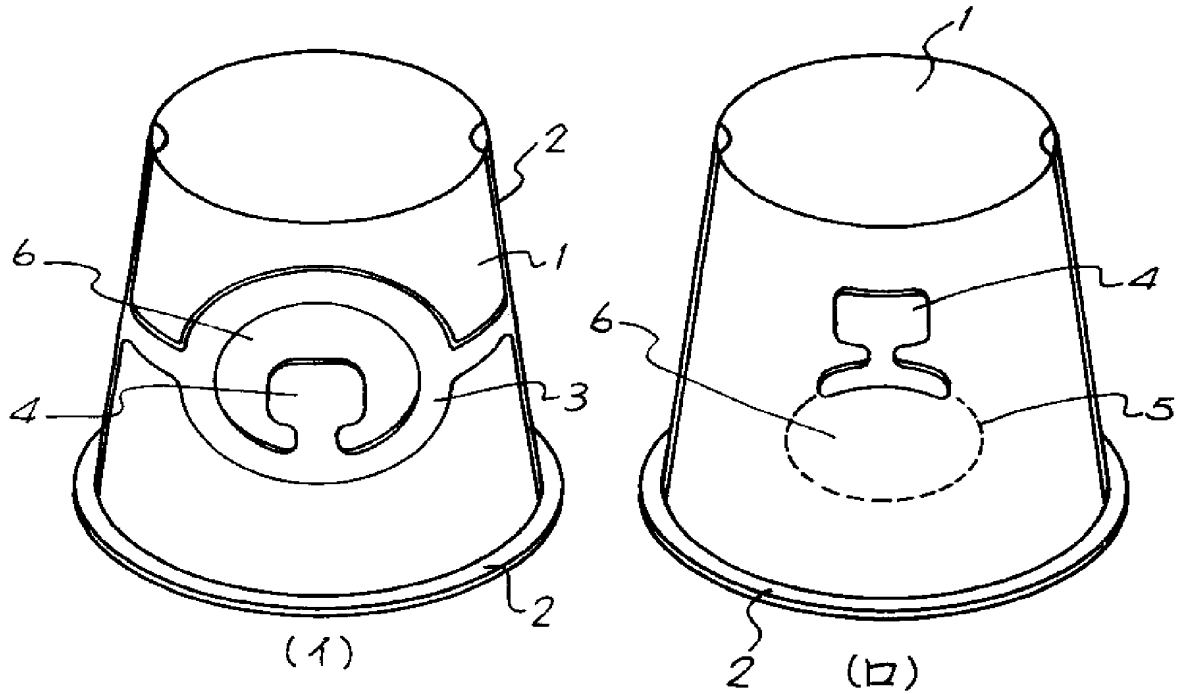


手別除

会社



※ 3 図



3/3

6 前記以外の代理人 ~~おまび~~ ~~者~~



(1) 代 理 人

住 所 東京都千代田区丸の内二丁目5番2号 三菱化成工業株式会社内

氏 名 (7060) 弁 理 士 横 倉 康 男



(2) ~~者~~

~~住 所~~



~~氏 名~~

53-86233